

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	原 田 美 代 子
2. 審査委員	主 査：(鳴門教育大学准教授) 内 田 香奈子 副主査：(鳴門教育大学特任教授) 山 崎 勝 之 委 員：(鳴門教育大学教授) 川 上 綾 子 委 員：(岡山大学教授) 三 宅 幹 子 委 員：(鳴門教育大学教授) 田 村 隆 宏
3. 論文題目	自然が限定された保育施設においても実践可能な自然を活用した 保育プログラムの開発と効果検証
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 原 田 美 代 子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和8年7月4日(土) 13時30分～15時00分 場 所：オンライン 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す、3部、全10章から構成されている。 第Ⅰ部 自然を活用した保育研究と創造性研究の動向と本研究の目的 第1章 自然を活用した保育に関する研究の動向と課題 第2章 創造性研究の動向 第3章 本研究の目的と意義 第Ⅱ部 自然が限定された保育施設でも実践可能な保育プログラムの開発と評価指標の構築 第4章 自然を活用した保育プログラムの開発 【研究1】 第5章 自然を活用した保育プログラムの効果評価方法の検討(1) —幼児の遊び行動に基づく評価方法の探索的検討— 【研究2】 第6章 自然を活用した保育プログラムの効果指標の検討(2) —Amabile理論に基づく幼児用創造性スキル尺度の開発— 【研究3】

第Ⅲ部 開発した自然を活用した保育プログラムの効果検証

第7章 自然を活用した保育プログラムの予備的実践と改善点の検討【研究4】

第8章 開発した自然を活用した保育プログラムの効果の検討【研究5】

第9章 総合考察

第10章 要約ならびに結論

概要は以下の通りである。

近年、幼児教育・保育の分野では非認知能力の育成が重視されるとともに、自然との関わりがその発達に重要な役割を果たすことが指摘されている。しかし、都市部を中心に自然環境が限定される施設も増加しており、自然を活用した保育の実践が困難な状況が報告されている。また、自然との関わりの効果を検証するための評価指標も十分に確立されていない。そこで本研究は、自然が限定された保育施設においても実践可能な保育プログラムを開発し、効果検証の枠組みを構築するとともに、その有効性と方法論的課題を明らかにすることを目指した。

第Ⅰ部、第1章では、自然を活用した保育に関する研究の動向を整理した。先行研究より、自然保育の効果としては、主体性・自立心、創造性・想像力、身体的能力など多岐にわたる特性の育成が報告されており、とりわけ自然物の多義性(用途が固定されていないことによる見立ての多様性)、偶発性(予測不能な出来事との出会い)、および活動における時間的・空間的自由度が、これらの特性を育む基盤的な環境条件として確認された。しかし、都市部を中心に自然環境が限定される施設も増加し、自然を活用した保育の実践が困難な状況にあることが分かった。また、自然との関わりの効果を検証するための評価指標も十分ではない現状が確認された。

つづく第2章では、自然の関わりとの関連が示唆されている創造性について、研究の動向を整理した。就学前またはそれ以前から創造性の育成を奨励すべきと主張されている(Kim, 2011)にもかかわらず、そのための具体的な手立てや実践成果に関する知見の少なさが指摘されていた(小田ほか, 2023)。また、幼児を対象とした創造性育成を目指す場合、従来の創造性の定義(e.g., Plucker et al., 2004)である新規性や有用性のある成果を生み出す力ではなく、「経験や行動、出来事に対して、新規性があり、個人的に意味のある解釈(Beghetto & Kaufman, 2007, p.73)」と定義されるmini-cの育成が望ましいとの判断に至った。また、Amabile et al.(1996)は、創造的活動の程度に影響を与える構成要素として、創造的活動の基礎となる領域関連スキル(domain-relevant skills)と、創造的活動を促進する創造性関連スキル(creativity-relevant skills)、およびタスク・モチベーションを挙げている。本研究では、前者2つを創造性に関連する内的要素(Relevant Skill: RS)とし、理論的枠組みとして位置づけることが妥当であると判断した。

以上の課題を踏まえ、第3章では本研究の目的と意義を示した。まず、自然環境の特性という条件のもとでRSが基盤的に機能することにより、mini-cとしての意味生成が促進されるという枠組みを提示した。その上で研究目的を以下の2点とした。第一に、自然が限定された保育施設においても実践可能な自然を活用したプログラムの開発を行うこと、第二に、RS

に基づく評価指標の開発と実践的検証によるプログラムの有効性を示すことを目的とした。

そして、第Ⅱ部では自然が限定された保育施設でも実践可能な保育プログラムの開発と評価指標の構築を行った。まず第4章(研究1)では、身近な自然物や自然現象の多義性・偶発性を活用した6種類の活動(ミクロな世界の観察や葉のこすり出しなど)からなる保育プログラムを開発した。プログラムは、身体を動かす短時間の活動を通じて、心身の切り替えを目的とする導入段階、風や波の音などの間接的な自然を用い、自身の感覚に意識を向ける段階、そして自然物や自然現象を活用する中心的活動を通じたRSが発揮されやすい状況の中で、主体的な意味を生み出す段階の3つのフェーズから構成される。つづく第5章(研究2)では、遊び観察に基づく効果評価方法を探索的に検討し、「遊び方の数」および「素材操作の工夫」を評価の観点として整理した。そして第6章(研究3)では、RSに基づく幼児用創造性スキル尺度(保育者評定尺度)を開発し、信頼性および構成概念的妥当性を検討した。その結果、一定の信頼性と妥当性を確認し、RSに基づく本尺度は、効果指標として一定の有用性を示した。

そして第Ⅲ部では、開発した自然を活用した保育プログラムの効果検証を行った。まず、第7章(研究4)では、保育現場における予備的实践を通じて介入効果の確認と、プログラムの改善点を検討した。その上で、第8章(研究5)では、5歳児を対象に本調査を実施し、開発したプログラムの効果を検証した。その結果、自然が限定された施設でも導入可能な設計として開発した本プログラムは、幼児の気づきや見立て、試行錯誤を支える活動として機能し得る可能性が確認された。なお、補足的分析において、介入前の創造性スキルが比較的低い幼児において、プログラム経験後の創造性に変化が生じやすい可能性が確認された。さらに、プログラム終了後に保育者から得られた語りでは、幼児の見立てや発想の広がりや日常の保育場面においても継続的に確認され、プログラム経験が日常の保育へと循環していく可能性が示唆された。このことは構造化されたプログラムの効果が、その実施期間に限定されるのではなく、保育者と子どもの双方における自然との関わりに対する志向性を変化させる可能性を示す重要な知見と言える。

上記の研究を受け、第9章では本研究で得られた知見を統合し、RSに基づく幼児用創造性スキル尺度の開発と、自然を活用した保育プログラムの検証結果を総括し、その有効性を論じた。その上で、第10章では本研究に関する結論を述べるとともに、今後の課題について論じた。

2. 審査経過

本論文の審査と評価の概要は、以下のとおりであった。

本論文では、都会など自然が限定された保育施設においても実践可能な保育プログラムを開発し、その効果検証の枠組みを構築しており、これまで科学的な検討が手薄であった本領域への研究に取り組んだ点が高く評価された。先行研究においても自然遊びに関する多くの実践やその有効性は紹介されているものの、その効果を実証的に検証した研究は少ない現状にあった。また、自然を活用した保育において育成される要因も多くの事柄が指摘される中で、そのターゲットを創造性に絞り、かつエビデンスに基づいたプログラムの開発やその効果検証を行った点が注目された。

また、評定ツールとして用いた幼児用創造性スキル尺度(保育者評定尺度)の開発を試みた点に

についても評価がなされた。創造性は抽象度の高い概念であり、特に幼児を対象とした場合は、他者評定法を用いる必要がある。本研究では創造性に関する研究知見を整理した上で、本尺度の開発や標準化を目指した点は注目された。

今後の発展としては、①幼児を対象とした観察法による創造性の評価方法の修正と改善、②質的評価など、量的側面に限らないプログラム評価方法の構築、③プログラムのモジュール別評価による内容的なスリム化と改善、④多忙な保育現場におけるプログラムの簡便な実施方法、そして⑤プログラムの波及効果の検証、などが示唆された。

以上のように、自然が限定された保育施設においても実践可能な保育プログラムを開発し、かつ、本プログラムにより育成を目指した創造性の効果方法についても先行研究からその枠組みを構築した本論文は、基礎研究から応用研究に至るまで丁寧に構築ならびに実行された研究論文であり、保育実践や社会に大きく貢献するものと判断された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 原 田 美 代 子 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。